

み 三つの住民運動の壁

私は「継続は力なり」という言葉が苦手だ。なんせ自慢ではないが飽きっぽい性格のようなのだ。そうは言っても住民運動では「継続は力なり」という言葉が意味を持つ場合がある。それは、活動のテーマに先見性があり、社会が追いついてくるのにどうしても時間が必要になるといえることがあるからだ。なのでどのような活動でも何が何でも持続しなければいけないと考えることはない、と思うのだ。

そもそも活動の継続が難しくなるのはどういときか。これまでいろいろな住民運動を見てきた中で私なりに考えたのは次の「3つの住民運動の壁」だ。

一つ目は、三年目にくる「手応えの壁」だ。「これだ」というテーマに一所懸命取り組んでいるのだが、なかなか目に見える成果が生まれず、賛同する人の輪も広がらない。結果的に活動資金も集められない状態になり継続が難しくなる。活動の出発点は「個人の思い」になることが多いと思うが、それを「社会の思い」とどのようにつなげていくかが問われる。先見性が高ければ「社会の思い」との乖離に悩む。手がかりとして、この加留多の「論より体験」が参考になるかもしれない。

二つ目は、五年目にくる「人の壁」だ。同じ活動の繰り返しによるマンネリ化が生じやすい時期で、活動をしている人のモチベーションの低下につながる。また、活動のリーダーたちが高齢化する、あるいはライフスタイルの変化などで家族や仕事とのバランスが難しくなる、場合によっては転勤などで活動から抜けざるを得ないこともある。後者は避けがたいが、前者については活動に関わる人の気持ちに立って、それぞれの思いを実現させる新たな取組をすることでマンネリ化から抜け出せるかもしれない。

最後の三つ目は、十年目にくる「時代の壁」だ。時代の変化によって活動の社会的意味も変化する。そもそも何を目的に活動をしてきたのかを振り返ることが重要な時期だ。目的は時代の変化に対して色あせていないのであれば「継続は力なり」の言葉を励みに続けよう。ただ目的を達成するための手段は常に柔軟に見直す必要がある。もし、目的が色あせているのであればやめる勇氣も持とう。